幼稚園の歌の中より

水町京子

片々の我れの笑靨が第一に小さき兒等の口にのぼりぬ

一心に我れをみつめてありし子の顔がえくぼとなり終りけり

ともすればきんぐの如く振まふ子我が右の手をはなさずありけり

我が手をばひとりしめせん爭ひに敗れたる子のかなしき瞳

玩具めく小さき靴をみてゐたり靴のあるじはわれみてゐたり

ものいはぬ京人形を見る如き兒に向ひゐてものもひもなし

すみさみたる心の上に子ども等の小さなる手がもちてくる幸

とめとめしいとけなき日のさひはひに歸りゆくがに子等とあそべり

日もすがらいたつきなども忘れゐき小さき子等とあそびほうけて

らんらんと十一月の陽はてれり前かけの子があそぶ砂場に

前かけの子等のせなかにらんらんと秋の光りが光る赫(かがや)く

幼稚園の砂場のすなの手觸(さは)りのこゝろよさはも霜月の朝

兒等の歌ふ小春の歌にさそはれて秋の山邊の旅を思ひぬ

その父と若き母との物語り小さき兒よりきく寂しさよ

ダーリヤの花のうしろに花よりはすこし大きなかほがものいふ

一大事をなしとげし如く折り紙の赤き小函をさゝげくる兒よ

ものいひたげに唇(くち)を動かしゐたる兒が一散に我れに抱きつきけり

人形の様なる兒故ある時はものもえいはず向ふなりけり

あだし人の子ぞと思へどいとしさのきはまりもなくつゝく寂しさ

をみなごはをみなごなりき六つの子も我と同じきものおもひする

つつましく人妻めきてふるまふ子六つになる子の寂しきすがた

眼(め)をあげて落葉する樹をみる時は兒等の面わもそゝろかなしき